

# 愛隣館研修センターニュース

第69号

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 2F TEL 075-621-3849 FAX 075-621-1579

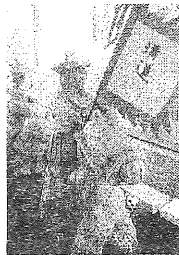
E-mail: airinday@sunny.ocn.ne.jp 振替 01020-5-39321

編集発行所: 社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者: 平田 義

## 今あらためて「平和」について考える

今、日本はいったいどこへ行こうとしているのでしょうか?教育基本法「改悪」され、防衛庁が防衛省になり、そして国民投票法案を成立させた後には憲法の「改悪」が目論まれています。暗黒の時代に突入しようとしている中で、最近参加した二つの集会から、今一度「平和」について考えてみたいと思います。

2月11日、滋賀県近江八幡市で行われました「平和なやきもの展」に行ってきました。私たちのセンターに8年前より陶芸の講師として来ていただいているダレンダモンテ師匠が主催された催しです。その案内パンフレットには以下のように記されています。



「私たちはあらゆるボーダー(境界)を乗り越え、子どもたちが平和に暮らす社会がくることを望んでいます。…中略…滋賀朝鮮学校の子どもたちは近江八幡とゆかりのある朝鮮通信使などをテーマに、近江兄弟社小学校は琵琶湖の生き物などをテーマに作品をつくりあげました。皆さま、このやきもの展を通じてぜひ、子どもたちの言葉ではなく作品に表された純粋なボーダレスの心に触れてください。」

やきもの展の会場には、滋賀朝鮮学校の子どもたちの作品と近江兄弟社小学校の子どもたちの作品、近江八幡東中学校の子どもたちの作品、アメリカ人と日本人の陶芸家、朝鮮人の美術家の作品が並べられていました。民族のボーダー(境界)も、大人と子どもとのボーダーもありません。そこには、作品を出品された人たちが親にこられた人たちの心が繋がる、まさしくボーダレスな「平和」な空間が存在していました。

しかし、現実の世界では、このやきもの展が開催される直前に滋賀朝鮮学校に警察の強制捜査が入っていました。六カ国協議開催を直前に控えて、北朝鮮との交渉を有利に進めようとする日本政府の政治的な弾圧です。子どもたちが学ぶ学校現場に警察権力が介入するという暴挙をやったのけたのです。ボーダレスな「平和」な世界とは正反対のことが繰り返されてきたのです。

日本と隣国の朝鮮とは朝鮮通信使がくるような友好な関係があった歴史もある一方で、1910年の「日韓併合」以降の日本による植民地支配下の悔恨の歴史があります。

私たちはその歴史を直視し、深い反省から新たな友好関係を築いていこうとしてきましたが、今の安部政権では、「従軍慰安婦」は強制ではなかったとか、「南京大虐殺」はなかったとか、歴史の書き直しをしていこうとする動きが顕著になってきています。このような日本政府の反動的な策略に惑わされることなく、ここ近江八幡で行われたように、それぞれの地域で人と人と

が出会い、繋がっていく中で、「ボーダレスな平和」を構築していく力を広げていくことが大切であると改めて考えさせられました。

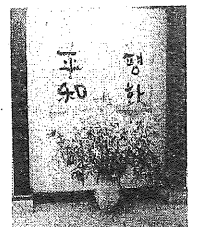
3月3日、「無防備平和条例をめざす宇治市民の会」結成集会に参加いたしました。沖縄から元読谷村村長の山内徳信さんが来られるということでお話をうかがいに行きました。

山内徳信さんは村の総面積の73%がアメリカ軍の基地であった読谷村の村長に39歳で就任され、六期24年間つとめられました。その間一貫して反基地村づくり闘争を押し進め、米軍基地の中に役場庁舎や村の公用施設などを次々と建設していきました。その当時のことを振り返って次のように述べられています。

「米軍基地のなかに役場をつくるなんてことを言っても誰も信用しませんでした。しかし『不可能』『非常識』と言われたのにねばり強い交渉、真剣な交渉、相手の心を動かす交渉の結果は陸上競技場も野球場もでき、ついには役場が建ち、文化センターも実現したのです。この反基地村づくり闘争は、村民に大きな夢と自身を与えることになりました。『不可能』は可能になり、『非常識』は常識となりました。まさか基地の中に役場ができるはずはないと思っている村民も結構いましたもの。真剣に努力すれば報われるものですね!」(「米軍再編と沖縄の基地」山内徳信著 創史社)

この日の講演は「平和に生きたい人類の知恵」というテーマで話されました。このような実践をされてこられた山内徳信さんの言葉ですから、一つ一つの言葉には重みと迫力があり、真実と希望があると確信できました。「基地というものは人間がつくったシステムなのだから、人間の努力によって必ずなくすことができる」「平和を求めて戦争に反対することが日本の国を愛することになるのではないか。たとえ今は少数派であったとしても、真実・正義は必ず勝利する」「一人一人の命が守られなければ何が人権か」「一回限りの人生、思い残すことなくたたかい続ける」

二つの集会に参加して、「平和」を求めていくことを諦めてしまいかねない、今の日本の状況の中で、今一度自分たちが何を考え何をなすべきかをあらためて突きつけられました。真の「平和」な世界の実現のために共にたたかい続けましょう。(平田)



### ニセモノに騙されるな!

『障害者は、その有する能力を活用することにより、進んで社会経済活動に参加するよう努めなければならない。障害者の家庭にあつては、障害者の自立の促進に努めなければならない。』

ふ～ん、「社会経済活動」に「自立」に努める、即ち努力…  
おお、これはまさしく、あの悪法「障害者自立支援法」の前文の一部、あるいは条文のどこかに違いないと臭いませんか?

しかし、これは、それに先立つ 2002 年に「障害者基本法」の第6条から削除された部分です。

「削除」! ?  
削除されたということは、一体どういうことなのでしょう。難しく考えないで、単純に考えます。「必要ない、相応しくない、現実と合わない…」等の理由が容易に浮かんできます。

つまり、日本もようやく「障がい」を個人の責任に押し付けるのではなく、本人の努力や家族の負担のみではない、社会の責任として、障がいの有無に関わらず一人一人が支え合う共生社会を目指そうという理念を基に決意したのではないのか? 何度も言いますが、2002年の話です。その決意はどこへ吹き飛んでしまったのか?

『参加することに意義がある』とは近代オリンピックの父、クーベルタン男爵の有名なことばです。これも今や既にどこかに吹き飛び、ますます商業主義に拍車がかかり、それにあやからうと、某知事も再選に出馬表明しています。

商業主義にまみれているとはいえ、それでも4年に一度のオリンピックは、まだ見る人々に夢や希望や勇気を与えてくれます。先頃も、トリノ冬季オリンピックに米国代表のスキークーソン選手として出場した韓国系米国人、トビー・ドーソン選手が父親との再会を果たしました。ところが父親と名乗り出る人物があまりにもたくさん現れたのは、これも商業主義の弊害でしょうか。しかしながら、「実の両親に会うためにオリンピックに出た、本当の親がテレビで見てくれていたかもしれない」という彼の夢は見事にな

られました。

ところが、この「障害者自立支援法」は4年前の決意もどこへやら、夢も希望も勇気も全く与えてくれません。本当の決意、いや理念は4年やそこらでホイホイと変わったり逆戻りするようなものではありません。結局これは、一部の厚労省の人たちが作り上げた、理念も何もない、福祉のお金をどう削るかというそれだけのための、張りぼてにすぎないのではないだろうか。

そこにあるのは、不安と不信と不快感。そんな張りぼてに対しては従う必要もないし、ピクピクする必要もない。そんなニセモノに騙されるな!

今更でもありませんが、「障害者自立支援法」のキーワードは「就労支援」と「定率負担」です。聞いただけでは何のことだかよくわからない、このような四文字熟語や標語はたくさん出てきます。ああ、そういえばドーソン選手の父親という人もたくさん現れましたね。  
ニセモノに騙されるな!

我々は、真実、本質をしっかりと見極めなければならない。「障害者自立支援法」で謳われていることは、障がい者も働いて立派な納税者(国民)になること、つまり「できないより、できるように」障がい者本人が努力すること、頑張ること。また、そのサービスも、本人と家族が使った分だけ負担するよう努力して下さい、ということ。つまり、「あなたはもっともっと頑張らなければならない」。

### ニセモノに騙されるな!

きちんと本質を見極め、自分たちが今一度自分たちの理念に立ち返って、考え行動していくことが必要なのではないだろうか。イエス団憲章の理念の一つ「私たちは、賀川豊彦が実践したセツラー(地域に生きる人々と共に歩む者)の精神を引き継ぐ。」に基づき、「あなたはあなたのままでいいんだよ」と共に歩んでいきたい。

(文責: 太田正人)

詩人 柏木正行さん (1945-2006) の

魂に触れる ②

た  
び

私は旅に出た

引きかえす事も思ひ止まる事も出来ない

人生という旅に 私は旅立った

苦しみの段階をよじ登り

希望の小道を歩み

悲しみの丘を越えて

孤独の海原を信頼の小船に身をゆだね

私は人生の旅をつづける

時には裏切りの嵐が私を襲い

乱れ咲く青春の花が私を楽しませてくれる

人の真心が私を勇気づけてくれ

刺々しい言葉が 茨のように私の脚を痛める

私はかけがえない人生を旅する

失望の霧が行手をさえぎり憧れの空に浮ぶ

希望の雲が私を勇気づける

時には社会の断絶のクレパスに立ちすくみ

また時には欲望の泥沼に脚を取られながら

私はいつはてるとも知れない人生の旅をつづける

互いに浮び流される一枚のこの葉のように

私は歴史の流れに流されてゆく

永遠の港をめざして 旅をつづける私

柏木正行第一詩集 こいつじの詩より

柏木正行著 子羊会発行

一九七六年



『今、そしてこれから、私たちにできることは?』 ゆうりん学習会を終えて

2006年度障がい児・者ホームヘルプ事業「ゆうりん」は4人の講師を迎え、学習会行いました。現場で活躍中の方々からたくさんパワーを頂いたことは言うまでもありません。心に響くメッセージから、うれしい波紋が広がります。

2006年5月13日

【人生の作り方を定型で考えないで。私たちは評価するためにいるんじゃない、子どもの人生を心地よくするためにいるんです。】  
知的障がい児通園施設 洛西愛育園 高木恵子さん

ある卒園児は高校を中退し、親やまわりの様々な人と「狭く深く関わりながら暮らす」ことを選んだ。意味ある人たちとつき合うことで楽しみを見つけ、生活者としての安定感を得ることができた。巣立って行った先輩の選択を例に、「この子に必要なことは何なのか」、目の前の固有の人生に喜びを見つけ、歩もうと提言される。「根っこは自己実現ですよ」と語りかける眼差しは暖かい。

『私はこんなに頑張っているのに、この子はなぜこうなんだろう・・・と悩んだことがあった。今、共に笑おう、楽しもうと考えたら楽になってきた。うん、これからも我が家流でいこう!』保護者  
『普段の利用者との関わりを振り返ってみると、どこか自分の価値観を押しつけていないか、活動する中でその過程を見過ごし、やり終えた満足だけで終わっていないかと考えさせられた。愛隣館で大事にしている個の尊重・スタッフと利用者の関係性について、再認識できた。』職員

2006年6月17日

【特別なことはしていないんです。諦めずに続けていくだけです。】  
「保護者の立場から障がいを見つめる」喜多明子さん

自閉症児の母である喜多さんは、我が子が絵カードやスケジュールを使って自己表現を可能にしていく姿を映像に記録され、1年毎の成長を日常生活の中から詳しく説明された。企画段階から反響が大きく、保護者から保護者へと参加希望の輪が広がり実現の運びとなった。

『我が家でもカードを使って頑張っていた時期があったが、全く反応がないとすぐに諦めていた。喜多さんの根気を見習わないと!すぐに結果を求めてしまうが、焦らず再チャレンジしたい。』  
『息子は私の作ったものを気に入って食べてくれていると思っていたが、自ら選ぶことも大切だと気付いた。本当は〇〇が食べたいなあと思っていたかも・・・』保護者  
『こちらの思いを伝えるカードから、子どもが思いを伝えるカードとしての使い方になるよう園生活の中で実践していきたい。』保育師

2006年9月16日

【障がいがある・ないに関係なく、誰もが地域で暮らすことをあたりまえにしたい。仕組みが無かったら、僕らで作ればいいんです。】  
西陣会 浅井将之さん

京都人の懐ともいえる街中で古いものと新しいものに囲まれつつ、どんどん地域に根ざしていく行動力の源が、この言葉にあるような気がする。制度にとらわれず、あの手この手で奮闘されてきたお話に共感し、引き込まれていく。必要な人に必要な支援を!と原点に立ち返る。自立支援法施行を目前にして、その矛盾点・課題についても熱く語られた。

『特別なことではなく、当たり前のことができない現実、これでいいのか?なんとかしよう!という気持ちからいろいろな事業が広がっていくことを再認識した。西陣会の取り組みの多様性・積極性に面白さを感じる。』職員

2007年2月17日

【ひとりひとりの暮らしのペースをどう作るかが大切。そこが居場所となった人たちが、たまたま一軒の家で暮らすんです。】  
ベテスダの家 中西昌哉さん

デイサービス・居宅介護事業・ケアホームと、地域ニーズを受け止めるべく事業展開されてきたベテスダの家の活動は、志を同じとする愛隣館スタッフにとっても心強く、刺激的であった。  
3年という月日を家の中で過ごしたAさんに対して、週3回の訪問から始め、少しずつ支援を増やしなが、ドライブ・散歩・外食と体験を重ねることで「暮らし!」になっていった過程の話は、非常に興味深かった。利用者が地域で暮らすことで地域を変革する主人公となることを目指し、家族も視野に入れた支援姿勢からは、学ぶところが多い。

『自分が担当し始めの支援で、選択肢が少ない利用者にとって働きかけをすればいいのか悩んでいた。お話を聞いて、まず一緒に体験を重ねることでコミュニケーションをとり、彼の楽しみを見つけようと気付かされた。』ゆうりんヘルパー  
『利用者・保護者の思いを大切に、同じ視点をもって支えられていることがわかった。近くにある、同じ思いをもつ事業所として交流をもてる時間が作れたら・・・と思う。』愛隣館職員

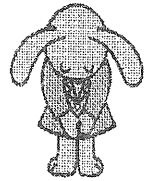
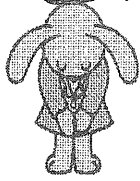
保護者の立場から・・・保育の現場で・・・i人のヘルパーとして・・・事業所のあり方とは・・・  
一人一人が振り返り、共感し、新たに踏み出す機会を得ました。  
(報告: 坪内浩子)

2007年1.2.3月の活動

- 1/16 京都ブロック会議 社会福祉法人イエス団の京都にある施設を単位として活動しています
- 1/21 アジア国際夏期学校 閉校式 2006年度インド研修生、1ヶ月間に及ぶ研修の報告
- 2/17 「ゆうりん」学習会 ベテスダの家 中西昌哉さんをお招きしました
- 2/19 障がい者の地域生活を考える地域学習会 伏見区内のネットワークをつくる第1歩になりました
- 2/24 障がい者自立支援法シンポジウム 厚労省の専門官のなめた発言に怒り心頭に!なんで「障がい者自立支援法」と仲良くやっていかなアカンねんな!明広ちゃんよ。
- 2/22-3/2 アジア国際夏期学校 タイセミナー  
バーンサイ: タイのチェンマイに開設されたHIV感染者とAIDS患者のためのシェルター、CAM: タイキリスト教団(CCT)エイズサポートグループ(AIDS Ministry) SEPOM: タイー日本移住女性ネットワーク(Self Empowerment Program of Migrant Women)、バンコク最大のスラム、クロントイ等々を訪問。毎年、新たな参加者が出会いによって、活動されている方々の思いに刺激を受け、戻ってこられます。
- 3/14 永眠者を思う日
- 3/21-22 社会福祉法人イエス団 新任職員研修会
- 3/29-30 年度末研修

# ご支援ありがとうございました

## 今後ともよろしくお願い致します



今年度も多くの皆様に支えられて活動を続けていくことができました。  
感謝を込めてお名前を載せさせていただきます。

### 愛隣館研修センター献金者

#### 《月定会員》

明石邦子、飯田二美、内海奈穂、後宮昭子、大原尚美、奥間早登子、奥田安子、岡部清、奥野美奈子、勝浦ゆたか、神戸萌子、片山絵里、金山秋義、君村千代子、岸佳津子、木村美由紀、木村耕、木全由喜、北園由希子、高下恭子、小北素子、五藤薫子、塩谷幸代、玉井勝也、高垣縁、刀根史恵、中村直子、長瀬雅子、内藤仙太郎・弘子、成瀬正代、西村めぐみ、西岡景子、林栄子、菱田万里子、引原勝美、福田尚子、藤田恭子、藤井幸子、藤井美恵子、堀尾勝世、松井知恵、壬生輝子、三谷昭子、村川知子、村上頌子、恵ヒロ子、森多美枝、毛利元美、森弘、安那英美子、安野喜仁・優美、山崎希充子、家形日出(53名 614,300円)

#### 《指定献金

#### 《夏期特別、クリスマス、年会費》

有本由美子、今井恵、織田雪江②、川尻良雄②、金井創、加治木政子②、香川博司、喜多明子

②、北野井一恵、黒田絢、小柳玲子②、近藤和江②、近藤孝子、小泉眞紀子、後藤一志③、五藤薫子、坂野由枝、志賀勉、清水元介、田村早千枝②、竹内富久恵、滝口宣、武澤信夫、土橋敏良、刀根史恵・陽子②、中田ひとみ、中田美歌・正道、中西仁美、丹羽克吉②、西田和可子②、野島正光・黛共子、原田恵美、朴実・清子②、福井達雨、舟橋登、福本潔、丸山澄夫、黛正、宮本真希子、村山盛嗣、恵繁治、山口政紀、柳町裕子、祐村明、富永裕子、木村拓貴、長尾文雄、杉原輝明、川上幹太、南原麻里、川田よしみ、シュペネマン・クラウス、後宮昭子、上野直子、賀川督明、金山秋義、柿本真介、木村雄二、木安純、近藤喜美子、清水充浩、静谷博子・泉、杉本健郎、田中仰、坪内達雄、土田佳奈、内藤仙太郎・弘子、中井咲子、成瀬正代、中井二美、林川静江、黛ただし、松岡匡宏、松井知恵、溝口修造・智之、三谷昭子、村田明隆、恵ひろ子、森弘、安野喜仁・優美、匿名、

富増献児、希望の家江口紅昊、石川拓也、林栄子

(99口 887,000円)

大阪四貫島教会、ぶどうの木保育園、奈良教会、箕面教会、みどり野保育園、恵泉幼稚園、十日町幼稚園、友愛幼稚園、田中工務店、同志社女子中・高等学校宗教部、一麦保育園、所沢教会、須磨教会、杉の子保育園、坂出育愛館、平安教会、同志社教会、大津教会、錦林教会、膳所教会、東神戸教会、市川三本松教会、洛陽教会、近江兄弟社会学園、京都丸太町教会、石橋教会、同志社高等学校宗教部、世光教会、野方町教会、八幡ぶどうの木教会、伊藤珠算教室、住みよい向島ニュータウンをつくる会、ふうせん文庫、赤とんぼ、ほっとハウス、世光教会、城陽教会、長岡京教会ミモザ会、新島学園中学校・高等学校、民商

(40口 522,762円)

2007年3月10日現在  
敬称略

尚、記入に際しましては万全を期しておりますが万が一記載漏れがありましたらご一報ください。

#### ★編集後記★

▼活字ばかりになることを避けようという気持ちがないわけでは無いのですが、▼その分、かなり内容は充実していると確信しております▼いかがでしたか?▼一人でも多くの方にまやかしたらけの福祉情勢を知ってもらうこと▼可能性を信じ強く願う行動すること▼そうすることで未来はいい方向へ変化するのだと思います▼このペン・ハイムが一人ひとりが大切にされる社会へ向けての歩みとなることを願いつつ、▼ご意見、ご感想をお待ちしております(さ)

▼ドイツの神学者で牧師のマルチン・ニーメラーの詩を紹介します

ナチが共産主義者を襲ったとき、自分はやや不安になった。

けれども結局自分は共産主義者ではなかった。何もしなかった。

それからナチは社会主義者を攻撃した。

自分の不安はやや増大した。けれども依然として自分は社会主義者ではなかった。

そこでやはり何もしなかった。それから学校が、新聞が、ユダヤ教徒が、とうとうつぎつぎと攻撃の手が加わり、

そのたびに自分の不安は増したが、なおも何事も行わなかった。

さてそれからナチは教会を攻撃した。私は教会の間であつた。

そこで自分は何事かをした。しかし、そのときはすでに手遅れであつた。

▼まだ間に合う! (ひ)

下記の通り、誤り・記載漏れがありました。ご迷惑をおかけしたことをお詫びし、訂正します。

■誤り

(1) ページ 右段 下から24行目 夢と自身 ⇒ 夢と自信

(4) ページ 中段右列 下から3行目 (40口 522,762円) ⇒ (42口 530,762円)

■記載漏れ

(4) ページ 愛隣館研修センター献金者 《指定献金(夏期特別、クリスマス、年会費)》  
芦屋岩園教会、丹波新生教会 を追加